

パリ・コミューンとシャンソン

— そこに歌われるコミュニューの心性 —

金山 富美

はじめに

成立から今日に至るまでの経緯から“革命の国”と形容できるフランス共和国だが、革命の歌といっても、18世紀大革命期に誕生し国歌に制定された《ラ・マルセイエーズ》を除いてわが国ではあまり知られていない。もっとも《さくらんぼの実る頃》には、ある革命の悲しい記憶が背景となっていることは時に語られる。その革命はパリ・コミューンである。

パリ・コミューンは、カール・マルクスが『フランスの内乱』で彼の理論に基づいて概説して以来、パリの民衆、なかでも近代的工場労働者が主となって蜂起、誕生させた革命政府と定義され、しばしば生産に携わる者とその果実の“横領者”との間の階級闘争というイメージが色濃い。確かに、コミューンの逮捕者の半数が労働者及び職人であったりことは事実だが、“コミュニュー”²⁾はより幅広い階層から成っており、それぞれに大きなうねりの中で社会的に、あるいは精神的に変革を求めようとしていたことを忘れてはならない。

後にアナキストとしてその名を知られるルイズ・ミシェルは、回想録³⁾の中で、パリ・コミューンの歴史経過を詳細に記録したジャーナリストのリサガレーや作家ジュール・ヴァレスよりも民衆に近く、ひと肌にも似た感覚でコミュニューの日常について証言しているが、野営やコミューン本部で、またコミューン崩壊後、牢獄でさえもよく歌った彼らの姿を生き生きと伝える。

パリ・コミューンに関わるシャンソンは、《ラ・マルセイエーズ》をはじめ大革命期から伝えられてきた歌や、どこの地方の歌かさえ定かではない古い歌も含め

れば数えきれず、主要なものだけでも優に 100 はくだらないが、本論考では特に 7 作品を取りあげて 4)、一つの大きな時代の転換点で街角に流れていたシャンソンの姿を浮き彫りにし、名も無き歴史の主人公たちの姿がいかに投影されているのかを考えていきたい。

コミューンのシャンソン

1. 《労働者の歌》 *Le Chant des ouvriers* (1846 年)

ピエール・デュポンの作詞作曲。デュポンの出身地リヨンは、1831 年、34 年と、織物工カニユが「働いて自由に生きるか、さもなければ闘って死ぬか」と唱和して壮絶な闘いを繰り広げた街だが、実はデュポンの父親がカニユであり、彼自身もその仕事を体験している。

Nous dont la lampe, le matin,	毎朝、鶏鳴の起床ラップで、
Au clairon du coq se rallume,	いつものランプの灯をともし、
Nous tous qu'un salaire incertain	われらみな、あてにならない賃金で
Ramène avant l'aube à l'enclume,	夜明け前から鉄床に連れ戻される、
Nous qui, des bras, des pieds, des mains	われら、腕、足、手、
De tout le corps luttons sans cesse,	この身を粉にしてたえず闘う、
Sans arbitrer nos lendemains,	明日の保障もないままに、
Contre le froid de la vieillesse.	老いの寒さを敵として。
(bis) Aimons-nous, et quand nous pouvons	愛し合おう、そして手を組み
Nous unir pour boire à la ronde,	みんなで輪になり飲める時は、
Que le canon se taise ou gronde	大砲の音が鳴りやもうと轟こうと
Buvons ! Buvons ! Buvons !	飲もう ! 飲もう ! 飲もう !
A l'indépendance du monde!	世界の独立のため !

一番には炭鉱労働者が、続いて農民、漁民、また乳母など労働する女性まで、民衆が口を糊する過酷な日々が実感を込めて描かれている。しかし全体のトーン

は必ずしも暗さが漂うわけではなく、行進曲風の力強いリズムにのせて、日々愛し合い、同胞と杯を交わし合える喜び、未来への希望が高らかに歌われる。そして六番は「愛の力は戦争よりも強い。天上から、あるいは地上からか、よりよい風が吹くのを待ちながら」と、人間愛が同胞の輪を拓けていくことを期待して締め括る。

デュボンの作品が職人や労働者が集まるゴゲットだけではなく、よりインテリが多く集まるカヴォーでもよく歌われたというのは、こうした翳りのなさ、一種のゆとりによるものでもあろう。デュボンのシャンソンには“救い”がある。彼と懇意で、作品集 *les Chants et Chansons* 『歌と歌謡』出版の折、序文でペンをとったボードレルは、《労働者の歌》を「労働の《ラ・マルセイエーズ》」と称賛している⁵⁾。

《労働者の歌》は、王政に最終的な決別を告げた 1848 年 2 月の革命家とその支持者の心をはっきりとつかんだに相違ない。デュボンその人はナポレオン 3 世の追従者として人々に忘れられていったが、このシャンソンはその後、インターナショナル・パリ支部のリーダー、ウジェーヌ・ヴァルランを中心に 1868 年に設立された共同食堂“マルミト（鍋）”でも歌われて⁶⁾生脈を保つ。製本工ヴァルランはコミューン議員に選出されている。

それ以前と比較して飛躍的に共和主義的精神が進展し、自由の概念も根づき、さらにブルードン、ブランキ、そしてマルクスの思想も加わって人々が自らの手で未来を作り上げていく夢を持ち始めた頃の《労働の歌》は、ボードレルがいみじくも述べたように「民衆の様々な期待や信念を鮮やかに写し取ったもの」⁷⁾であり、その心髄はパリ・コミューンの舞台、第二帝政の民衆に引き継がれていく。《労働の歌》は、ラ・マルセイエーズとともに後記六つのシャンソンの基層を成していると考えられるだろう。

2. 《下層民》 *La Canaille* (1865 年)

当時フォブール＝サン・ドニの下町にあったコンセール・パリジャンを拠点に、力強い声と愛国心を刺激する歌唱法で“民衆のラシエル”と呼ばれ、大変な人気

を得ていた女性歌手ロザ・ボルダスに歌わせるため、アレクシ・ブーヴィエが作詞した。ロンドンで第一インターナショナル結成、パリにも支部が設立された時期である。曲はかつてデュポン作《パンの歌》の歌唱で脚光を浴びた歌い手で、ベルリオーズにもその音楽的才能を認められたジョゼフ・ダルシエである。

通称ラ・ボルダスは、古の反体制の民衆を具現するかのように腰までの長い髪をおろし、古代ギリシャ風の衣をまとい腕をむきだしにして、よく《ラ・マルセイエーズ》を歌ったという。しかし、もっとも好んだのは《下層民》であった。このシャンソンは彼女の声を生かし、また彼女の声もこの歌に新たな命を吹き込んで、パリ・コミューンの時期にはとりわけ熱狂的な支持を得た⁸⁾。

Dans la vieille cité française	フランスの古い都市に、
Existe une race de fer	鉄の民族がいる、
Dont l'âme comme une fournaise	魂は燃えさかる炎のようで、
A de son feu bronzé la chair.	その火照りで肉体を焼いた。
Tous ses fils naissent sur la paille,	息子は藁の上で産声を上げ、
Pour palais ils n'ont qu'un taudis.	住居といえはあばら一部屋。
C'est la canaille, et bien j'en suis !	それが下層民、かく言う私の出た処！

《労働の歌》の主人公がそうであったように、“下層民”も槌を握る日雇いの炭鉱労働者や工場労働者だけではない。「ペンを手に」（2番歌詞）、「愛する女にソネを紡ぎ、空の胃袋を恋心でごまかす」芸術家、ボヘミアンも含まれる（3番歌詞）。ここには、労働者に限らず、時の権力やブルジョワ的価値観に拘束されずに自由に生きようとする人々が歌われているのだ。「それが下層民、かく言う私の出た処！」は、そうした民衆の矜持によるものといえる。

ところで、ラ・ボルダスの名前は、コミューン議員の一人、画家クールベを中心に組織された芸術家連盟後援の、戦争負傷者、未亡人、孤児の支援コンサートのパスターに見出すことができる。1871年5月11日、ヴェルサイユ軍によるパリ総攻撃と“血の一週間”の10日前のことである。空気を貫くような声で「それ

が下層民。かく言う私の出た処！」と歌い上げる迫力に、テュイルリー公園に集った観客は沸きに沸いたであろう。当日のコンサートは、コミュニンの悲劇的な終焉を予感するがゆえに、熱狂もいや増すものであっただろうと想像する。

《下層民》の歌は、民衆を民衆たらしめている素朴で健やかな彼らの“哲学”，そして自らの出自と生き方を決して恥とはしない彼らの誇りを、ダイナミックに、そして雄弁に伝えてくる。

3. 《お人好し》 Bonhomme (1870年)

エミール・ドゥルーの作詞作曲である。

〈bis〉 Bonhomme ne sais-tu pas あんた、知らないのかい
Qu'il est temps que tu te réveilles そろそろ目を覚ます頃だってことを。
Voilà 20 ans que tu sommeilles 20年間、あんたはまどろんでいた。
Voilà 20-ans qu'à tes oreilles 20年も、平等があんたの耳に
L'égalité pleure et gémit 嘆き、呻いていたのに。
Bonhomme, bonhomme, lève-toi le jour luit.

お人好し、お人好し、起きなさい、日が輝いている。

〈bis〉 Et vive la commune , bon dieu コミュン万歳、まったくだ
Et vive la commune. コミュン万歳

繰り返しの部分は上記のように Vive la Commune 「コムニオン万歳」とされていることが多いが、本来 Vive la République 「共和国万歳」であり、プロシアのパリ包囲の頃はそのように歌われていた⁹⁾。それが「コムニオン万歳」に定着したのは1880年以降と思われる。つまり、約十年間フランス社会に蔓延したコムニオン・ヒステリーがようやく鎮静化し、穏健共和派の大統領グレヴィのもと、コムニオン関係者への大赦の動きが出てからのことだ。

とはいえ、人々はそれまでにも《お人好し》を、その時の雰囲気次第で、めいめい知っている出来事に応じて替え歌にしていた。軽妙なロンドのリズムに台詞

が合わせやすく、どんな戯れ言も軽やかに乗るためだろう。たとえばルイズ・ミシェルはパリ・コミューンの時期、「支配者どもは自分たちの剣をとぎ、絞首台を組み立てる、お人好し、お人好し、お前の鎌をとげ」と歌った、と語る¹⁰⁾。また彼女は、ニューカレドニア流刑を終えて7年ぶりにヨーロッパの地を踏んだ際、ロンドンで多くの仲間とともにこの歌を合唱し、命を落とした数多くのコミュニューを偲んだと証言する¹¹⁾。軽妙で、滑稽さを感じさせる《お人好し》だが、歌の浸透力とエネルギーには欠けていなかったことを伝える逸話である。

作者ドゥルーの代表作には《お人好し》以外にも興味深い作品がある。パリ包囲の頃の《ピフテキー一枚のパリ Paris pour un beefsteak》である。ここでは、燃えるような愛国心ゆえにその身は痩せ、次々と餓死していく民衆を尻目に、祖国よりも自分自身の食卓を憂えるブルジョワジーと、敵国と与して休戦条約に持ち込む国防政府の、さながら「ピフテキー一枚でパリを売りに出す」姿勢に対して最大級の皮肉が浴びせかけられている。ブランキ主義者でもあったドゥルーの詞の力は、他の詩人にもまして鋭い風刺である。

それでは《お人好し》では何が風刺され、「あんた」と呼びかけられる対象は誰を指すのか。この疑問には、ジャック・ボノム Jacques Bonhommes という名前が回答の鍵になる。この名は昔、農民一般に対するあだ名として定着していた。大革命以前は、貴族があらゆる権利をもつ一方で“ジャック・ボノム”たちは領主にすべてを差し出し、空腹をかかえて地面をはいつくばる動物以下の存在だったのだ。大革命以降も農民は「ブルジョワに、その惨めさを笑われ、その血が退廃していると陰口をたたかれて」（《お人好し》二番歌詞）きたが、それにもかかわらず、自ら行動を起こすことはなかった。

パリ・コミューンは社会主義の理想を目指し、自分たちと同じ目標と希望を、パリ近郊や地方の農民とも分かち合おうとする。初等教育さえ十分享受できていない農民の精神にも届くように、優しく忍耐強く説き聴かせるメッセージが、コミュニューズの一人で、当時ジョルジュ・サンドと並びその文才を評価されていた女性作家アンドレ・レオの手によって綴られた。

兄弟、あなた方はだまされているのです。私たちの利害は同じものなのです。私が要求しているもの、それはあなた方もまた望んでいるものなのです。農村の労働者の皆さん、パリが求めている解放、それはつまり、あなた方の解放なのです。パリが陥落すれば、貧困の輓がいつまでもあなた方の首につけられたまま、それはいずれ、あなた方の子供の首に移されることでしょう。だから、どうかパリが勝利するのに力を貸してください。農民に土地を、労働者に道具を、すべての人に労働を！ パリの労働者より。¹²⁾

《さくらんぼの実る頃》の詩人で、当時モンマルトル区長を務め、コムニオン教育委員としても活躍したジャン＝バティスト・クレマンも、農民への呼びかけと啓蒙にペンをふるった。だが努力も空しく、“ジャック・ボナム”は自分たちを抑圧する権威を疑おうとさえしなかった。それどころかヴェルサイユ政府に加担してパリへの食糧供給を絶ち、コムニオンの破滅に貢献することになる。その現実を前にして、製粉業者の家に生まれた農民出身のクレマンはいかばかりの落胆を覚えたことだろう。農民は頑なにコムニオンを無視し、敵意さえ抱いていた。

それでも、コムニオンは彼らに向け「あんた、知らないのかい。大地はあんただけのものだってことを。公証人のもとで記載されなくても、あらゆる財産は平等という契約のもとにある」（四番歌詞）と、《お人好し》を繰り返し歌いかけた。

この歌には愚かなまでの“お人好し”が皮肉られているが、それ以上に哀れな農民に差し伸べたコムニオンの友情と連帯への思いが読み取られる。と同時に、このシャンソンは、時として闘いに必要な狡猾さを欠き、その温情と優柔不断が仇なして隙となり、崩壊の道を辿らざるをえなくなったコムニオン自身の人の好さも彷彿とさせる。パリの蜂起者たちは、あらゆる不道徳、退廃、残虐さというデマをヴェルサイユ政府の間諜や御用新聞によって飛ばされたが、間違いなく「世界でもっとも恐ろしくない人びとであった」¹³⁾。

4. 《コムニオンのラ・マルセイエーズ》 La Marseillaise de la commune(1871年)
国歌《ラ・マルセイエーズ》の替え歌。《お人好し》の五番が「あんた、聞こえ

ないのかい、フランスのあの歌詞が。それはラ・マルセイエーズ、93年を成し遂げたルフラン。お人好し、お人好し、その歌が聞こえたらいつもの道具を置いて、銃を取りに行くのだ！」と歌った翌1871年、仮講和条約の前に書かれた¹⁴⁾。

Français ! ne soyons plus esclaves !	フランス人よ！もう隷属はよそう！
Sous le drapeau, rallions-nous,	赤旗のもと、結集しよう、
Sous nos pas, brisons les entraves,	歩みながら、軛を断ち切ろう
(bis) Quatre-vingt-neuf, réveillez-vous	89年、今一度よみがえろ。
Frappons du dernier anathème	最後の制裁を与えよう、
Ceux qui, par un stupide orgueil,	愚かな傲慢さによって
Ont ouvert le sombre cercueil	銘も刻まれず死んだ同胞の
De nos frères morts sans emblème.	陰鬱な棺を開けてしまった者たちに。
Chantons la liberté,	自由を歌おう
Défendons la cité,	都を護ろう
Marchons, marchons, sans souverain,	進もう、進もう、君主おらずとも
Le peuple aura du pain.	民衆は糧を得られる。

この頃、パリの人々はすでに、臨時国防政府に欺かれていることに気づいていた。愛国心溢れる人々は、第二帝政時から都合よく利用されてきた経緯により《ラ・マルセイエーズ》を冒読された歌だとし、この国歌を歌おうとはしなかった¹⁵⁾。こうして、人々の身体にしみ込んだリズムに新しい詩が載せられた。

《コミュニケーションのラ・マルセイエーズ》を詩作したとされるジュール・フォール夫人（旧姓ド・カステラーヌ）なる人物について詳細は不明だが、詩を紡ぐことのできる豊かな教養をもっていたことは間違いない。「君主おらずとも民衆は糧（パン）を得られる」という科白には、理屈ではない文字通り生活の香りが漂い、社会の底辺で暮らす人々への温かな視線を感じ取ることもできる。

また、ジョルジュ・サンドも前述のアンドレ・レオも男性的なペンネームを用いざるをえなかったことから知られるように、当時は今では想像もできないほど

多くの社会的禁忌が女性に課せられていた。フォール夫人はそんな中で、作者として名前を出しても許される恵まれた環境にあった、と推察される。彼女はおそらく、「婦人団体のいずれもがその頃の恐るべき時世をただただ憂え、戦争犠牲者のための救援事業に加わった。ブルジョワの女性、国防にかけてはまことにお粗末な能力しかない国防政府要人の夫人たちさえも英雄的だった」¹⁶⁾と、ルイーゼ・ミシェルに勇気と行動力を讃えられたブルジョワ夫人の一人だったかもしれない。

《コミュニケーションのラ・マルセイエーズ》には、敵に決して背を向けることのない戦いの意志が示されている一方で、「いや、もう王も冠もいらぬ、流血も喪の悲しみもたくさん」(三番)、「もったいぶった美辞麗句も、意味のない空言ももうたくさん」(五番)というように、本歌には認められない反戦、そしてキリスト教理を含むあらゆる鎖からの解放が叫ばれていることにも注目したい。それはコミュニケーションの女闘士が伸べたように「おそらく女が反抗を好むというのは事実だ」からであり、「男ほどには権力によって墮落させられていなかった」¹⁷⁾からであり、また、彼女たちが本来それによって救われるはずの宗教に長い間苦しめられていたからであろう。女性のそうした傾向は、あらゆる権力を呪われたものとするコミュニケーションのそれと重なるところがある¹⁸⁾。

いずれにせよ、71年初めの頃は、愛国の熱い思いが階級を超えて多くの人々を結びつけていた——「フランスの民衆よ、目覚めよ。時の鐘が鳴っている、おまえを救済する時の鐘だ」(三番)。

しかし、悲劇は間近に迫っていた。フランスの敗北を望まぬ愛国者たちが死守し統治していたパリを敵が襲ってきたのである。いかなる侵略者も手を染めたことがないほどの残酷さで襲撃をしかけたのは、同国人であった。

5. 《血の一週間》 La Semaine sanglante (1871年)

1871年5月21日、その日もコミュニケーション主宰の慈善コンサートが開催されていたが、それが悲劇のプレリュードとなる。間諜を通してポワン＝デュ＝ジュール門、サン＝クルー門に防備兵のいないことを知ったヴェルサイユ軍は、人々が音楽と詩の朗読に酔いしれている間に難なくパリに侵入したのである。

それから8日間、炎が街々をなめ、銃弾の音が響き渡り、パリは血の涙を流す。27日、数えきれぬほど死体の山を築いたヴェルサイユ兵たちは、もはや抵抗のできない逮捕者を、負傷者も含めて即刻、ペール＝ラシェーズ墓地の白い壁の前で銃殺した。彼らが虐殺したコミュニー、パリの民衆の数は、コミュニーに殺められたヴェルサイユ兵の30倍以上と推定される¹⁹⁾。

コミュニー壊滅後には、三色旗テロが横行する。隣人の裏切りも日常茶飯事となってしまったパリに約3ヶ月にわたって身を潜めていたジャン＝バティスト・クレマンは、あちらこちらから聞こえてくる銃声と人々の悲鳴に耳を覆いながら、歯をくいしばりペンを動かしただろう。

Sauf des mouchards et des gendarmes,	密告者と憲兵をのぞけば、
On ne voit plus par les chemins	通りのどこを見ても
Que des vieillards tristes aux larmes,	涙にくれる哀れな老人と、
Des veuves et des orphelins.	未亡人、孤児ばかり。
Paris suinte la misère,	パリは悲惨さの表情を隠せず、
Les heureux mêmes sont tremblants,	運のよかった者さえ震えている、
La mode est au conseil de guerre	明けても暮れても軍法会議、
Et les pavés sont tout sanglants.	路上はまさに血の海だ。
Oui, mais ...	だが、しかし……
Ça branle dans le manche,	それもずっとは続かない、
Les mauvais jours finiront.	不幸な日々もいつかは終わる。
Et gare à la revanche	こっちがお見舞いする番だ、
(bis) Quand tous les pauvres s'y mettront !	貧しい民が集結する時には！

隠語

突「追い詰め、引っ立て、撃ち殺す、しょっぴくことは手当たり次第。娘をかばう母親、年寄りに抱かれた子供でも……」(三番歌詞)——人間の仕業とは思えないヴェルサイユ軍の蛮行、罪なき人々の断末魔の喘ぎ、暗く深い絶望が綴られたこの詩は、1885年刊行の作品集に発表される。曲は《労働者の歌》の作者ピエー

ル・デュボンの《農民の歌 Le Chant des paysans》のそれが採用されており、注目に値する。

1849年発表《農民の歌》の出だしは、「共和国が出現した時、2月の稲妻の中、その長い光の槍をしっかりと握り、フランスは沸き返っていた」である。次いで、第二共和制成立から一年もたたないうちに当初の希望の光はかき消え、ナポレオンの野心が見透かされてきたと歌い、末尾では農民が農民自身の共和国を打ち立てるべきではなかったか、と力を込める。

クレマンが血を吐くような詩を、その頃にはすでに忘却の彼方に追いやられていたデュボンの、しかも《農民の歌》のメロディーにのせた意図は何であったのか。それを考えてみることは、《血の一週間》について、いや、コミューンのシャンソンを測量するうえでも無駄ではない。

コミューンが農民たちを《お人好し》の中で歌っていたことはすでに述べたが、滑稽で哀れな彼らとともに、そこにはお人好しコミューンの姿も看取されていたことを思い起こしたい。以前から、とりわけ選挙の惨敗をなめるなかで「文盲で、不決断で、パリに従えない農民のフランス」²⁰に対峙してきた共和主義者コミューンは、それでも農民たちに向かって長い軛からの解放と決起を呼びかけた。その大きな理由の一つは、国民の大多数を占め、フランスの大地に生きる人々と町の労働者が一つになることが真の共和国を創造するからだろう。

さかのぼって、一方のデュボン作《農民の歌》にも、興味深い歌詞が見いだせる。「農民は労働者と手を結び、主人となるだろう」(五番)のくだりである。このことが「農民の共和国」の実現には不可欠な条件であったのだ。

パリ郊外の農家の出であったクレマンは、コミューンが、大多数を農民出身者で構成されたヴェルサイユ軍(いわば“農民の軍隊”である)によってこの世のものとは思えない残酷さで息の根を止められてしまった事実、コミューンの悲願が農民の無理解によって無惨な形で断たれた現実を前にして、苦悩のどん底に突き落とされたことだろう。自身の出自である農民を動かすことができないままパリを惨状に至らせてしまったことへの、われとわが身をさいなむ後悔の念もあったのに相違ない。《血の一週間》の冒頭から七番までたたみ込まれるように詠まれ

た背筋も凍る描写の数々は、その悲痛な思いが詩人に吐かせた言葉なのである。

《血の一週間》には、ヴェルサイユ軍による血の粛清の証言やイエズス会への弾劾が込められている一方で、痛々しいまでの敗北から立ち上がろうという姿勢と、コミュニオン復活への望みが込められていることも忘れてはならない。いかなる絶望の中でも人は希望を見出し生きていかざるをえない。それが生き残った者の使命であり、死んだ仲間の弔いともなる。クレマンはたとえ一縷の望みであるとしても、それを労働者と農民の連帯に見出していたのではないだろうか。詩人が《血の一週間》を《農民の歌》と結びつけた理由は、以上のように考えられる。

実際、末尾で2度繰り返される「貧しい民が集結する時には」の箇所は、音階の急激な上昇がある。「貧しい民」とは街の労働者と農民の双方であり、互いの結束が求められているのだ。我々はその、悪夢のような結末を前に嫌悪と恐怖におののき、絶望のどん底に陥ったクレマンがもう一度立ち上がり、叶えられなかった夢に手を伸ばそうとしている姿を見る。祈りにも似た詩人の思いは、《農民の歌》でデュポンが歌った「何千何百年もかなえられてこなかった」「農民の共和国」の悲願と、数十年の時空を超えて重なりあう。

6. 《さくらんぼの実る頃》 Le Temps des cerises (1868年, 1885年)

ジャン＝バティスト・クレマンが1866年に書いた田園風の恋愛詩に、その2年後、アントワヌ・ルナルが清らかなメロディーをのせて歌い、好評を得た。

- | | | |
|---|--|-----------------|
| ♪ | Quand nous chanterons le temps des cerises | さくらんぼの実る頃を歌う時、 |
| ♪ | Et gai rossignol et merle moqueur | 陽気なナイチンゲールや |
| ♪ | Seront tous en fête | おしゃべりツグミが浮かれ出す。 |
| ♪ | Les belles auront la folie en tête | きれいな娘たちはのぼせ上がり |
| ♪ | Et les amoureux du soleil au cœur | 恋人たちは心も朗らかになる |
| ♪ | Quand nous chanterons le temps des cerises | さくらんぼの実る頃を歌う時、 |
| ♪ | Sifflera bien mieux le merle moqueur | おしゃべりツグミもずっと上手に |
| | | さえずるだろう。 |

コミュニオン敗北後、関係者への裁判、処刑、弾圧²¹⁾がいつ終わるとも知れない日々、クレマンはイギリスに亡命していた。1880年によく帰国を果たすと、ジュール・ゲード率いるフランス労働党の社会主義運動に参加しながら、作品集を企画する。詩集『シャンソン』は1885年に刊行、《さくらんぼの実る頃》が掲載された。

“未来のシャンソン”と名づけた作品群の中に《血の一週間》が含まれていることは不思議ではない。だが、すでによく歌われていた恋愛詩もその一つとしたのは、「1871年5月28日日曜日、フォンテーヌ・オ・ロワ街の女子看護兵、勇敢な市民ルイズに捧げる」の献辞を添え、以下の歌詞（四番）を書き加えてのことだった。

J'aimerai toujours le temps des cerises

C'est de ce temps-là que je garde au cœur

Une plaie ouverte !

私はいつまでもさくらんぼの実る頃を愛する。

その時から私の心に残る さっくりと開いた傷口！

Et Dame Fortune, en m'étant offerte 運命の女神が私のもとにつかわされても

Ne pourra jamais fermer ma douleur...この苦しみが癒えることはないだろう

J'aimerai toujours le temps des cerises

私はいつまでもさくらんぼの実る頃を愛する、

Et le souvenir que je garde au cœur ! そして心に残るあの思い出もまた！

ところで、ピエール・サカは、この名歌が捧げられた女性市民について「有名な女性闘志ルイズの美談を喚起させる」²²⁾と述べているが、サカが語るルイズ・ミシェルは、クレマンが“ルイズ”に出会った日にはすでにヴェルサイユ軍によって捕えられ、風によってパリからサトリ監獄まで届くすさまじい爆音を耳にしながら友人たちの安否を気遣っている。そして彼女は後に、生き残ったコミュニューから聞いた話だとして、次のように告げる——「生き残った人々は〔中

略] もっとも頑強にしつらえたフォンテーヌ＝オ＝ロワ街のバリケードにいた。大きな赤旗がはためいていた。中央委員会、コミューン委員会の面々、もちろんテオフィル・フェレ、ヴァルラン、ジャン＝バティスト・クレマンらの姿もそこにあった。ヴェルサイユ軍に真っ向勝負し、残り少ない銃弾を自ら血を吐くような思いで浴びせかけているのだった。すでに落ちたサン＝モール街のバリケードから一人の愛らしい女性が走って来て、自分を使ってほしいと言った。うら若い女性の犠牲を望まない人々は安全な場所に移るように勧めたが、彼女はバリケードにとどまった。まもなく弾薬を使い果たしたバリケードを、ヴェルサイユ軍の砲弾の一斉射撃が破壊した。硝煙弾雨の後、この娘を見た者は誰もいない。けなげなこの女性に、ジャン＝バティスト・クレマンは《さくらんぼの実る頃》を捧げた²³⁾。

《さくらんぼの実る頃》のヒロインは、詩人ランボーが詠ったように「愛情に満ちた大きな太陽の下で」、「霰弾砲の青銅の上」「動乱のバリを」「走り回った」「赤銅色に焼けた」「ジャンヌ＝マリの手」をもったコミューンズの一人だったのである。作曲家アントワーヌ・ルナールは新たな歌詞を知ることなく、1872年にこの世を去ったが、それを知り、そこに込めた詩人の思いを知っていたら、我々の知るメロディーを発想しただろうか。

閑話休題、田園詩とパリの哀歌は見事に一つに融け合って違和感を感じさせず、歌の世界への想像力をふくらませてくれる。女子看護兵ルイズはパリ近郊の農家の出であったかもしれない。美しく成長した娘は素朴な青年と「二人連れで夢心地のなか」「恋のさくらんぼが血の滴となって葉陰に落ち」（二番歌詞）を経験した後、初恋の多くがそうであるように一つの終止符を打った。恋の苦しみから逃れるようにパリに出た彼女はコミューンと出会い、新たな生き甲斐を知る。それは激しい恋に似た熱狂の時だった。間もなく、歓喜の時は断たれる。

若い女性がコミューンのパリそのものでもあることは言うまでもない。一瞬輝いた青春、明るい未来への希望、そこに立ちふさがる過酷な運命、血の赤さに染まるさくらんぼ……この詩はパリ・コミューンの叙情詩であり、また叙事詩ともなる。

《さくらんぼの実る頃》の解釈には、優れた歌手たちによるさまざまな詠法も手助けになるだろう。ナナ・ムスクリ、コラ・ヴォケール、ジュリエット・グレコ、そしてイヴ・モンタンの4人の歌唱を比較した時、前者2人は「春」、「青春」、「恋」の歌派、一方後者2人については「暗さという点では、どこか共通の地平を歩んでいるように感じさせる」²⁴⁾との指摘があるが、至言である。

確かに《血の一週間》を経て詩人の精神世界は一変した。だが、その断層は田園詩の世界がそのままに置かれていることにより、しかとは見えてこない。とはいえ、真の芸術は見えないものを、それが見えないままに感じさせる力をもつのではないか。そのことが《さくらんぼの実る頃》を、ナナ・ムスクリには純粹な牧歌的恋愛として歌わせ、コラ・ヴォケールにはいくばくかの哀愁を添えて表現させもすれば、さらにその対極、つまり牧歌的世界の「うらがえしの陰画の世界」としての捉え方も可能にする。コミュン最後の日のクレマンとルイズとの出会い、娘に対する詩人の束の間の恋心、彼女の死とコミュンの命の終焉……コミュンへの「鎮魂歌」²⁵⁾として表現するイヴ・モンタンの詠唱も納得ができる。

それでは、ジュリエット・グレコについてはどうだろうか。これまでに眺めてきたシャンソンの文脈から、《さくらんぼの実る頃》を顔立ちは違っても《血の一週間》の“姉妹”と捉えれば、グレコの歌唱法が感覚的にもっとも合致するように思われる。コミュンへの哀悼という意味ではモンタンと共通するが、グレコにはモンタンの「鎮魂」は感じられず、過去の真実を決して現在と切り離してはいない、生々しく「かなりドロツとした」²⁶⁾ものがそこにある。

その何かを、クレマンの、いやコミュンの遺言と形容しても構わないのではないか。また、その遺言を“ユマニテ humanité”（あえて訳せば「人類愛」）の継承、と表現しては言い過ぎだろうか。実際、多くのコミュニューが銃殺刑の直前に「ユマニテを讃えよ、コミュン万歳 Vive l'humanité, Vive la commune」と誇り高く叫び、そして倒れた。

ユマニテ溢れる桃源郷を夢見て、人が自由で独立した人間として働き生きている世界の実現のために闘い散ったコミュニュー。“実存主義のミューズ”のねつとりとした歌唱は、彼らへの同情と深い敬意から生まれ、彼らの血潮をその果た

せなかった夢とともに新しい世代の血脈に移し込もうとする彼女の情念のなせるわざだろう。グレコは「私の心に残る ざっくりと開いた傷口」から今なお血がにじみ出ているのを見てとり、それをわが身に感じているのである。

7. 《彼女は死なず》 Elle n'est pas morte (1886年)

《インターナショナル》²⁷⁾の作詞で知られるウジェーヌ・ポティエが、血の一週間の15年後、『民衆の叫び』の創刊者でコミューンの同志でもあったジュール・ヴァレス死去の年に書き上げた。「彼女」はもちろんパリ・コミューンである。

On l'a tuée à coups d'chass'pot	シヤスポー銃を撃ち込まれ、
A coup de mitrailleuse,	機関銃を見舞われて、
Et roulée avec son drapeau	赤旗にくるんでもろとも
Dans la terre argileuse.	泥土に落とされたコミューン。
Et la tourbe des bourreaux gras	だから脂ぎった下種の死刑執行人どもは
Se croyait la plus forte.	われこそ最強とうぬぼれた。
(bis) Tout ça n'empêche pas Nicolas,	それでも、ニコラ、
Qu'la Commune n'est pas morte !	コミューンは死んではない！

四番までは、コミューンと支援者だけでなく、負傷者や罪なき人々まで「大鎌で草を刈り」「リングを叩き割るように」虐殺したヴェルサイユ軍の悪行が次々と数え上げられ、彼らの傲慢さが糾弾される。五番では御用記者と並び、「コミューン=ならず者」伝説をねつ造して世間にまき散らしたマキシム・デュ・カンやデュマを名指しして、汚れたペンの罪業を断じる。六番は、ヴァレスの葬儀が生き延びたコミューンと数多くの民衆の参列によってさながらコミューン回顧の行進となったことを語り、締め七番では、その状況が「マリアンヌ」、つまりフランス共和国を体現していると述べ、「今、“コミューン万歳！”と叫ぶ時である」と歌い上げる。ここに描写される「赤銅色の肌」をもつマリアンヌは、かつてランボーが詠った「ジャンヌ=マリ」であり、《さくらんぼの実る頃》のルイ

ーズと重なる。つまりマリアンヌはコミュニオンであり、詩人にとってはコミュニオンこそがマリアンヌなのである。したがって、歌の題名にある「彼女」には、「コミュニオン」だけではない、「真にあるべき姿のマリアンヌ」の意も込められていると考えられる。だからこそ、ヴィクトル・パリゾの楽天的でどかな音楽にのせ、ポティエは自信に満ちて予言するのである——「彼ら（＝罪深い輩）もほどなく気づくだろう コミュニオンは死んでいないということを」。

《彼女は死なず》は、血の一週間という過去からこのシャンソンが創作された1886年という“現在”を通過して、パリ・コミュニオンの犠牲が必ずや報われる明日を指向する。行く手に光を見て進もうとするこの歌もまた、クレマンの言葉を借りるなら“未来のシャンソン”と呼べるだろう。

おわりに

歴史家はパリ・コミュニオンをしばしば「祭り」と形容する。その中日とも言える72日間を含むパリ・コミュニオンの月日、人々に愛され、歌い継がれたシャンソンを検討してきた我々は、「思想と革命との婚姻の祝典」²⁸⁾の「御輿」に「ユマニテ」という夢が載せられているのを理解した。だが、それも今では《さくらんぼの実る頃》に面影を残すのみである。コミュニオンのシャンソンがほとんど歌われなくなった現代、そこに込められていた思いは消え失せてしまったのか。

いや、それは継承されていた。グレコがしばしば《さくらんぼの実る頃》に続けて歌唱する《息子は歌う Mon fils chante》はその一例だろう。

…Pour ceux qui meurent en chemise	肌着姿のまま、
A l'aube du temps des cerises	さくらんぼの実る頃はもうすぐなのに、
Sous les yeux des fusils	銃口を向けられ死んでいく人々のため、
Mon fils chante ……	わが息子よ 歌いなさい ……

「さくらんぼの実る頃はもうすぐなのに、[中略]銃口を向けられ死んでいく人々」、そして「五月の赤い太陽を、ピレウスの港を照らすそれを、もはや見る

ことのない人々のために」(二番)の詞を聞けば、1967年から7年間続いたギリシア軍事独裁政権に対するこのプロテストソングに《さくらんぼの実る頃》が本歌取りされていることは明らかだ。作詞を手掛けたモリス・ファノン²⁹⁾はコミュニューの遺言を意識し、それを現代的テーマに忍び込ませることによって歌の世界を重層的に表現し、「戦い」という言葉を決して用いない歌詞の中にも強い意志を滲ませるのである。コミュニューのシャンソン同様、人間の尊厳と同胞への共感と連帯が歌われ、その思いはルフラン——「私の息子、そしてお前、私の息子から生まれてくる息子よ、自由が死んでいく限りは、自由がどうか世界中で命をつなぐように、私の息子よ、歌わなければならない」によって後世にバトンを渡す。

悲しいことに、ユマニテの対極にある人間に巣くう性質が今なお大願成就を阻む。しかし、それでもなお、歌の中にパリ・コミュニューの魂が息づく限り、希望の光が消えることはない。

コミュニューのシャンソンは、人間がユマニテと自由を回復するための、あるいはそれを目指し連帯するための「愛の歌」²⁹⁾と呼べるだろう。「人間」³⁰⁾であり続けることが時に困難な時代、忘れられたパリ・コミュニューの歌に耳を傾けてみることも必要なのではないだろうか。

註

- 1) J.ルージュリ『1871—民衆の中のパリ・コミュニュー』上村・田中・吉田訳、ユニテ、1987、p.247.
- 2) コミュニュー関係者は“コミュニュー communal”と呼ばれることが一般的だが、ルージュリはその呼称が明らかに軽蔑的なニュアンスを含んでいるとする (ibid., p.6)。本論考でもその意見に倣い、“コミュニュー-communeux”の方を使用する。
- 3) Louise MICHEL, *La Commune - Histoire et souvenirs*, La Découverte, 1999.
- 4) 本論考では紙数の制約により、各シャンソンを1番のみ記載する。
- 5) Charels BAUDELAIRE, « Pierre Dupont », dans *Curiosités esthétiques - L'Art romantique et autres œuvres critiques*, Classiques Garnier, 1971, p.561.
- 6) 木下賢一『第二帝政とパリ民衆の世界』山川出版社、2000、p.225.
- 7) BAUDELAIRE, op.cit., p.565.
- 8) Robert BRÉCY, *La Chanson de la Commune*, Les Éditions Ouvrières, 1991, pp.92-93 / François CARADEC, Alain VEILL, *Le Café Concert 1848-1914*, Fayard, 2007, pp.188-190.

- 9) BRÉCY, op.cit., Annexes – Chapitre 1-II.
10) MICHEL, op.cit., p.71.
11) ibid., p.338.
12) Posper-Olivier LISSAGARAY, *Histoire de la Commune de 1871, La Découverte*, 2000, pp.238-239.
13) J.ルージュリ, op.cit.,p.218.
14) BRÉCY, op.cit.,p.68.
15) MICHEL, op.cit., p.71.
16) ibid., p.119.
17) ibid.
18) 当時の多くの史料からルージュリは「もっとも明確な社会主義の言葉が聞かれたのはおそらく、女性のクラブであった」と読み取っている。J.ルージュリ, op.cit., p.222.
19) ibid.,pp.243-244.
20) ibid., p.204.
21) 1872年のインター弾圧法は、すべての社会主義および労働運動を抑圧した。
22) ピエール・サカ『シャンソン・フランセーズ』永滝達治訳, 講談社, 1981, p.55.
23) MICHEL, op.cit., pp.243-244.
24) 三木原浩史『シャンソンの四季』彩流社, 2005, p.24.
25) ibid., p.25.
26) ibid., p.24.
27) コミューンに対する血の粛清が続く1871年に創られる。ポティエは1887年に亡くなるが、同年刊行の革命詩集に掲載されたことで注目が集まり、翌年ピエール・ドゥジャエテルの曲にのせ歌われたところから世界中に広がっていった。
28) L. シュヴァリエ『歓楽と犯罪のモンマルトル』河盛好藏訳, 文藝春秋社, 1986, p.178.
29) グレコはコンサート(1988年, ウィーン)で、「さくらんぼの実る頃」を« C'est une immense histoire d'amour »と紹介している。
<http://www.youtube.com/watch?v=e8GDSJ2jIS0>
30) 「親たちが実際にコムニオンを体験し、コムニオン参加者とより身近な関係にあるもうひとりとは、[中略]《コムニオン参加者こそ人間だった》と述べた。」
L. シュヴァリエ, op.cit., p.160.
【その他の参考文献】
M. ラゴン『フランス・プロレタリア文学史—民衆表現の文学』高橋治男訳, 水声社, 2011.
ア・イ・モロク編『パリ・コムニオン』高橋勝之訳, 大月書店, 1971.
大島博光『パリ・コムニオンの詩人たち』新日本新書, 1989.
G. RENAULD, *Jean Baptiste Clément*, Éditions DETRAD aVs, 2005.

(かなやま・ふみ: 島根大学法文学部教授, 研究テーマ: フランス女性研究・シャンソン文化史)